

口の中にできる口腔がんのひとつ、舌がん。口の中から鏡で見ると分かるし、違和感があるの分かる」と思っていて、進行がんで発見されるケースが意外に多い。その舌がんの啓発活動に力を注ぎ、早期発見・早期治療に努め、さらに、体によさしい治療を推進している医師がいる。その名医とは――。



その人は、昭和大学歯科病院（東京都大田区）口腔外科の新谷悟教授（写真上）。口腔がんのうち約40%を占める「舌がん」。舌の側面の舌縁にできるケースが多い

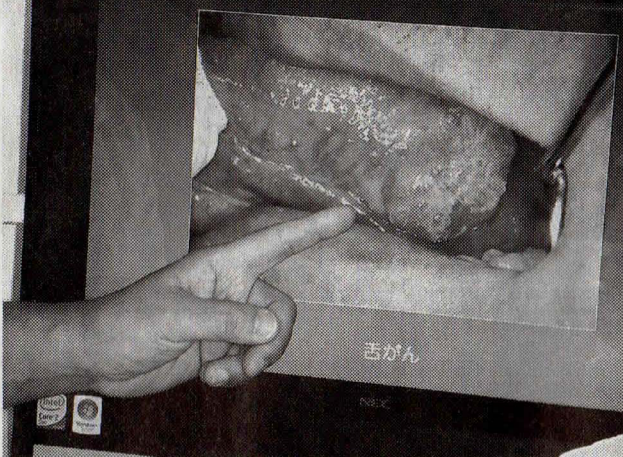
外来患者は年間3万8000人を超え、手術件数は「奇形・変形症」「炎症」「外傷」「のう胞」

「良性腫瘍」「悪性腫瘍」など年間約500件。この中でがんの手術数は65件。内訳は「舌がん」38例、「上顎・下顎歯肉がん」15例、「頬粘膜がん」「口底がん」各3例、その他6例である。

舌がん 襲侵低 治療

これが新谷式

早期発見が信条です



「無治療期間」を徹底して短くし、がんの進行を抑え、患者の不安な思いを解消して最善の治療に入る。その治療は、「低侵襲治療」。いわゆる「体によさしい治療」である。「口腔内エコーでがんの深達度を正確に診断」「セリチネルリンパ節生検」「首の傷口が目立たない切開」――これが新谷式「舌がん低侵襲治療」の

「リンパ節転移がある」と手術前に放射線療法と抗がん剤を併用し、がんを小さくして実質的な縮小手術を行います。もちろん首の傷口が目立たない術式です」

「舌めたくないのです。私の大好きな祖母は舌がんで舌が痛いと言ひ、食事もできずに亡くなりました。頑張った口の中のがんを治す口腔外科医を目指したのです。だからこそ、諦めない医療を推進したいのです」

「がんだからといって舌を厚く切除したのでは、術後のQOL（生活の質）に影響を与えます。がんの深さを正確に知ってより舌を残せると、QOLを下げずにすみます」

ホタルイカと菜の花パスタ

春が旬の、甘さ、ろ苦さを兼ね備える菜の花は非常にβカロテンとビタミンB、C、カリウム、カルシウム、鉄、ナトリウム、ミネラル、非常に豊富。このろ苦さと甘さをパスタと合わせれば、代活発になる季節にぴったり。



ホタルイカは味が出る大ぶるを使う

舌がんとは

口の中にできるがんは「口腔がん」といい、日本人の全てのがんの約2～4%を占めている。年間の患者数は7000人、そして、約3000人が亡くなっている。口腔がんの中では「舌がん」が最も多く、全口腔がんの約40%を占め、男女比は2対1で男性に多い。こ以外で大きな原因となるのが「舌への慢性的な刺激」と「不衛生な口腔」。がんのできる場所の多くが舌の側面の舌縁。舌縁に刺激を与えると、「歯の治癒をしたときのかぶせ物が舌に当たる」「歯が欠けたのをそのままにしておき、常にその部分が舌にあたる」などである。